第4回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル	
日時：令和7年1月19日（日）	場所：本庁舎18 階
参加者：市民委員40名、構想日本・コーディネーター、市・事務局	
コーディネーター ： A 班 構想日本 総括ディレクター 伊藤 伸 B 班 構想日本 シニアフェロー 定野 司 構想日本 フェロー 柏崎 亮太	
議事要旨： 1. 開会	＜省略＞

2. グループワーク

A 班

委員 A-10：

ジェンダーに関する視点が提案書から抜け落ちているように思う。自治会等の地域の活動では、意思決定層は男性ばかり。どちらかの性別が3割以下にならないようにする等、意思決定を行う際どちらかの性別に偏りすぎない配慮はどこの部分でも必要だと思う。

高齢女性の貧困は日本全体の問題。女性の方が長生きする方が多い。そういった部分の記載は必要。

スポーツ、特に野外スポーツへの参画や理系学部への進学については、女の子は未だに少ない状況。東大阪市は理系の会社が多いので、何らかの形で支援することができるのでは。また、これまでの話し合いの中で抜け落ちていたのが、日本語を母語としない方への支援。ふりがなや英語が書かれていないチラシでは情報が行き届かない。なるべくふりがなをつける、あるいは英語でサマリーを記載する等して、母語が日本語でない方への配慮が必要かと思う。

コーディネーター：

ジェンダーについては提案以外のところに記載しており、提案全体の中には入っていない。全て多様性の観点に入ってくる。提案1や2において、「子どもから高齢者まで」と記載している中に、当然ジェンダーの視点も含まれている、といった趣旨になるよう書きぶりを考えたい。

委員 A-7：

今回の参加者の中では、私だけが障害のある子どもを育てる保護者だった。私が参加していなければ、障害福祉の話は一切出なかったかもしれない。子どもの障害福祉を決めるのは、結局健常者である大人たち。福祉サービスを利用する際、なぜこのような仕組みなのか、と疑問に持つことが本当に多い。障害者の気持ちを考えられておらず、子育てをしたことがない人たちだけで決定されているのではないか、と感

じてしまう。提案書の中にも障害児の文言が入っていない。当事者を交えた、あるいは当事者が話せない場合は、当事者の保護者の意見を必ずふまえていただきたい、と思っている。

コーディネーター：
提案3にその要素を含めている。提案書については、いつも悩みながらまとめている。提案書としてまとめようとすると、どうしても抽象化してしまう。結果的に本当に伝えたかったところが出てこなくなる。表現の仕方については、もう一度考えてみる。
確かに委員として参加されなければ、障害がある子どもの話は出てこなかったかもしれない。この自分ごと化会議は東大阪市民の縮図という観点で行なっているわけではなく、たまたま抽選で当たって手を挙げてくれた方々との議論、という形で行なっている。この場が子どもファーストや高齢者のウェルビーイングを考える唯一の場ではない。様々な場においてあらゆる意見を聞いてはいるものの、多様な方々の視点が入ってこなかったのではないか、という観点から無作為抽出という手法を使っている。

委員 A-10:
お祭り等賑やかな場所が苦手で参加できない子どもがいる。今、クワイエットルームを校内に設ける学校もあると聞く。しんどくなったらひと休みできるスペースになっている。クワイエットルームをできるだけ設け、情報提供してほしい。

コーディネーター：
「にぎわいをつくる」という提案がある中で、そういった場に参加しづらい人がいる。ここも多様性という視点。

委員 A-22：
「子どもと高齢者の交流」という提案があるが、学校のどういった場面で関わるのか、気になった。

コーディネーター：
交流という視点は入っているが、学校の場を使って、具体的にどういった交流の仕方があるか。以前出た意見としては、高齢者が持つ特技を活かしていくというもので、歴史や昔の遊び等が挙げられていた。ただ、どこでやるかについてはまだ出てきていない。
留守家庭児童育成クラブの場、という話もあったかと思う。

委員 A-23：
今回の会議を通して、様々な意見を聞くことができた。また、東大阪市において色んな補助やサポートがあると改めて認識することができた。今回の提案書において、住民・地域でできることに加え、行政でできることについて記載があるが、すでにやっていることも多いと思う。可能であれば、市で見ていただき、写真や説明書き等現状について書き加えてもらえれば、具体的な進捗が見える化するのではないかと思う。
コーディネーター：
言い換えると市が上手く伝えられていないところでもある。提案項目7つ目の情報提供につながってくる。

委員 A-1：
住民ができることをまとめてくれているが、技術性が求められる取り組みが多いと感じている。確かに大事な取り組みばかりだが、行動に移せるかどうかは怪しい。

コーディネーター：
これまで色んな自治体でやってきて、同じ意見が出ているところ。住民ができることについては、一人ひとりがやっていくことを書いているが、チェックできるわけではない。最終はお任せするしかない。だからこそやらないといけないこと。

委員 A-6：
今日地域でかるた会を開催する予定で、その役員を担っているがこちらの会議を優先した。小地域ネットワークの取り組みの1つだと思う。青少年指導員の立場で開催している。今年で38回目。百人一首のため、これまで経験していないと参加しづらい。一部の留守家庭児童育成クラブでは百人一首を取り入れているところもあり、参加できる子どもたちもいる。家庭で遊ぶこともなかなかないので、参加者は少ない。コロナで開催できていなかったが、昨年3年ぶりに再開した。今年も開催するかどうか議論はあったが、今回開催することに至った。これまで周知は自治会の回覧板だけであったが、学校に協力してもらって子どもたちに伝わるように工夫した。どれだけの方に参加してもらえるかは分からないが、今回の参加者数を踏まえて次年度以降の開催を検討する予定。先ほど高齢化による担い手不足の話があったが、確かにほとんど70代から80代で、その方々が中心になって携わってくれている。今の現役世代にどれだけ関わってもらえるか。皆さん忙しいので、なかなかそういった時間が取れないかと思うが、このままでは距離がなかなか縮まらない。子どもはもちろん、現役世代や子育て世代に関わってもらえないと、高齢者と接する機会を増やすことは難しい。

学校の活用について先ほど話があったが、授業の一環として地域の方が講師として関われるような形を柔軟にできないか。もちろんできるできないはあるかと思うが、市独自の学校教育ということで、参加のハードルを下げられるような仕組みがつくれないか。

コーディネーター：
学校という場を活用して交流できないか、との意見であった。実際、総合学習等の時間に地域の方を講師として招くのは、かなりハードルが高いことが多い。今回の提案書を提出することで、その辺りが柔軟にできるようになれば。

委員 A-27：
提案項目2「多くの人々が世代を超えて集える賑わいの場所を創出する」について、私が幼い頃は瓢箪山に博物館があり、高齢者から歴史を学ぶ等交流があった。しかし、博物館閉鎖後はそういった交流が全くなくなった。そういった場所があれば、交流が増えると思う。

コーディネーター：
現在の状況は。

事務局：
耐震の関係で一旦閉鎖になっている。少し先にはなるが、現在新たな博物館の整備に向け進められているところである。

委員 A-5：
提案6の住民項目で「危ない場所をなるべく避ける」について、具体的にどこが危ないかマップに落とし込み、分かりやすくしてはどうか。

コーディネーター：
市では今行なっているのか。

事務局：
災害に備えて、ハザードマップは公開している。不審者情報についてはメールでお知らせはしているが、マップ化はしていない。

コーディネーター：
杉並区の小学校では、社会科の授業の一環で、子どもたちが通学路を歩きながら、危険ポイントをチェックするような取り組みがあった。東大阪市ではやっているか。

委員 A-5：
社会科の授業で、防災の一環として最近行った。校区内を実際に歩いて、地震が起きた際の危険ポイントをチェックし、写真を撮って発表した。

コーディネーター：
自分の身の回りのことについては、授業の一環で確認ができる。さらにもう少し広げて、市全体で行えたら。ある自治体では防犯・防災メールを蓄積し、マップ化していると聞く。東大阪市ではやっていないか。

事務局：
一度確認してみる。

委員 A-21：
この提案の半分でも実現できればいいと思っている。自分では考えつかない内容も提案項目に挙がっていた。
月に2回京都でフリーマーケットが開催されるので参加している。物価高騰の今、東大阪市でもフリーマーケットを開催できないか。地域ではなく市が主催で月1回開催できれば、交流が生まれるのでは。

コーディネーター：
提案項目2のにぎわいづくりにつながる。行政としてフリーマーケットは開催しているか。

事務局：
イベントの中の1つの取り組みとして実施されているところ。公園をお貸しするケースはある。

コーディネーター：
NPO が主体となって開催されることが多い。頻繁に開催することで、にぎわいや交流が生まれるかもしれない。

委員 A-25：
花園ラグビー場をうまく活用して、そこを拠点ににぎわいづくりにつなげられないか。

コーディネーター：
現在の状況は。昨年度まではHANAZONO EXPOを開催していたが。

事務局：
ラグビーやサッカーの試合にあわせて、ラグビー場前の噴水広場で、市や関係団体主催で色んなイベントを実施している。

コーディネーター：
ラグビー場は年間通して、大体予約は埋まっているのか。

事務局：
現在、ラグビーとサッカーどちらも使用しているので、試合数が増えている状況。ラグビーについては、高校・大学・社会人とあるのでおおかた埋まっている。
また、ラグビーやサッカー以外でも、2年前にはファイナルファンタジーとコラボした花火大会が行われるほか、民間主催のイベントを開催するなど、にぎわいは増えつつある。

コーディネーター：
東京の人と東大阪市の話をすると、ほぼ間違いなく「花園ラグビー場」が出てくる。シンボルになっている。すでに活用していると思うが、さらに広げていければいい。

委員A-11：
提案書を読み、これまでの議論を思い返すことができた。例えば「運転マナーを心がける」のように、自分の気持ち次第ですぐできることもあるが、取り組むにあたって準備が必要なものもある。忘れないように提案書を手元や目につくところに置いておきたいと思っている。行政も同じだと思う。私自身職場の会議で意見や提案を受けるが、すぐやれることと予算がかかり後回しになってしまうことがある。私たちでできること以上に、行政でできることの項目が多い。今後やってもらえること、やってもらえないことが出てくるはず。進んでいるのかどうか、こちらから見えないことがある。何らかの形で、取り組みの優先順位や今すでに取り組んでいること、あるいは時間がかかるような場合はその目安を目に見えるようにしてほしい。見えると、この会議に参加して良かったと実感できる。

コーディネーター：
先ほどの「半分でも実現してほしい」につながってくる。全部実現するのは、行政はもちろん自分たちもなかなか難しい。優先順位をつけていかないといけない。

「私たち住民」ができることについては、おそらくできる・できないの判断も人によって違うと思う。それぞれ皆さんで考えていただきたい。「行政ができること」については、例えば3年後までに示せないか、といったところはある。昨年度の提案についても、当然ながら今継続して検討しているところ。

委員 A-15：
自分ではなかなか思いつかないことも多くあった。色んな方々の意見を聞いて、新たな気づきを得た。今回参加させてもらって良かったと思っている。提案書の内容について、その進捗が分かるような仕組みがあるといい。今は参加しているのでこの場で意見を言えるが、この後進捗状況を見て意見したいときに言える手段が、市の HP にあるといい。参加者以外の方の意見も出てくるかもしれないので混乱してしまう可能性もあるが、上手くまとまることもあるかもしれない。自分自身あまり意見が言える方ではないが、せっかく東大阪市に暮らしているので、進捗状況を発信してもらって、それに対して全員参加型で発言できる仕組みがあれば、少しでも関わっていけるかと思う。

コーディネーター：
進捗状況が細かく掲載されているわけではないが、昨年度の提案書は市 HP に掲載されている。今後どう進捗を見せていけるか、事務局で考えてくれていると思う。広く意見を言える場についてはどうか。

事務局：
市 HP に問い合わせフォームがある。メール・電話でもご連絡いただければ。

コーディネーター：
このメンバー以外からの意見として、今回試行的に Liqlid を活用してウェブ上で募集した。市公式 LINE アカウントに登録をしている 8,000 人に発信したが、意見は少なかった。今後の課題である。

委員 A-13：
前回は「子どもファースト」がテーマだったと思うので、今回高齢者もテーマにいれてもらえたことはすごく進歩していると思った。もちろん、子育てや子どもファーストは大事なことだが、今大多数を占めているのは高齢者と言われる世代の方々。その方々を現役世代がどう支えていくのか。今の日本の礎を築いてくださった先人たちに対して、敬意を持ってどのように接していくかはすごく大事なことだと思う。また、普段関わることのない立場の方々の意見をお伺いし、無知であったことを知れて有難い。
それぞれの立場で発する意見が今回の提案書になる。意見が単に自己主張や要望になると行政批判につながってしまう。この境目がすごく難しい。1つのことに特化してしまうと、今回の会議の趣旨に反することが出てくる。今回提案書を見させてもらったが、その辺りを上手くまとめてくれていた。

先ほどの花園ラグビー場のイベントだが、ラグビーの試合と合わせて市が色々と行ってくれている。しかしながら、ラグビーを観戦した人しか参加していない。試合とあわせてのイベント開催だと、いつも人でごった返しているので、そのイベントを目的に参加することは自転車・電車・車いずれにしても困難。ラグビーやサッカーの試合がない時でも、例えばフリーマーケット等、花園中央公園全体で単体のイベントを企画してもらえたら、にぎわいが生まれると思う。

コーディネーター：
花園ラグビー場を拠点化できないか。

委員 A-7：
東大阪市ではラグビーの選手が実際に来てくれ、ラグビーの授業がある保育所や幼稚園、小学校がある。市としてラグビーを推したいのは分かる。でも全員がラグビーをしたいわけではないと思う。ラグビー選手が授業に参加できるのであれば、高齢者も参加できるはず。また、学校によっては例えば韓国の文化を学ぶ授業があって、伝統的な衣装や楽器に触れる機会がある。外国の文化を学ぶこともとても大事だが、まずは自国の文化を学ぶ機会が必要。例えば授業の一環で着物を着る機会もあっていい。私自身着物を持って高齢者施設へ行き、着付けをしてあげるといった取り組みをしているが、元々着物を着ていた高齢者の方が多く、着付けについて逆に注意を受けてしまうこともある。着付けに慣れた高齢者の方に授業に参加してもらうことは可能ではないか。見直してもらいたい。
世代間交流について、子どもが小学校に入学したタイミングで新型コロナウィルスが流行した。元々自治会には加入しており、地域の子どもと交流させてあげたくて子ども会に加入する予定だったが、コロナで入会受付がストップしていた。昨年から子ども会は復活したが、残り2年なので結局入会していない。東大阪市全体として子ども会は停止していたと思う。地域の取り組みは、子ども会に入っていないと参加できないものが多く、自治会に加入していないと、そもそも子ども会に入れない。自治会に加入する方も減っているなか、自治会費は高齢者のために使われていることが多い印象がある。自治会費はもう少し子どものために使われてほしい。

コーディネーター：
子ども会の活動については、行政で何か行うものではないかと思う。先ほど事務局から説明があったように、地域のネットワークや担い手が少なくなってきている。これは東大阪市に限らず、全国どこも同じ状況。前回、子どもが老人クラブに参加する、といった話があった。子ども側から参加するというのは大きい。先ほどの着物の着付けは1つの交流手段になるかと思う。

委員 A-9：
第1回に参加したとき、私自身市に対して不満がないことに気づいた。「道がデコボコしている」、「街灯が少ない」といった意見があったが、私がそう感じていなかったのは、歩きにくければ渡って別の道を歩けばいいし、道が暗くて危ないと感じたら、タクシーを使う。そういった別の選択肢を取れるからこそ不満に感じていなかったのだと気づいた。でも立場が変われば、別の選択肢を取れない方もいる。今回、障害があるお子さんの家族や LGBTQ の方の生の声を聞いて初めて考えることもあった。今まではインターネットやテレビで得られるステレオタイプの情報でしか判断できなかった。皆さんそれぞれに悩みがあって、困っていることがある。0から1になることを考えるのは難しいが、実際に話を聞くことによって、私の中で理解が深まった。自ら提案という形ではないが、皆さんに教えてもらって勉強になったことがたくさんある。私は参加できたのでこの提案書を読むことができる。でもここに参加していない多くの皆さんはなかなか読めない。自分から読みに行くのは難しい。私もここに参加しているから読めているが、そうでなければ市役所にあったとしても多分読まない。色んな立場からの意見がまとめられたこの提案書を読んでもらう機会があればすごくいい。
私は毎朝花園ラグビー場を通って出勤している。でも中に入ったことはない。ラグビー場招待等も過去にあったが、私よりもお子さんがいる家庭が行くものかなと思ってしまう。金曜日の夜に通ると、土日に開催するイベントの準備をされている姿を目にすることもあるが、気後れしてしまい実際に参加したことはない。中を見てみたい気持ちはあるので、試合がない日にふらっと入れたり、気軽に参加できるイベントがあればいいと思っている。

コーディネーター：
意外と敷居が高いと感じている人が多い。それでも、ラグビー場はみんなが知っている場所。ラグビー以外の展開が必要なのかもしれない。
前半部分の「選択肢がある人はいいが、選択肢を持てない人がいる」といった視点は是非提案書に取り入れたい。それに気づくことは、まさに自分ごと化会議のねらいの1つ。
まだ、ご発言のない方は全体会でもお聞きしたい。

委員 A-21：
東大阪市へ引っ越してくる前は、大阪は治安が悪いというイメージがあった。東大阪市に住んで30年以上経つが、地方から見えるものと実際に住んでみた感じは違うと思った。今となっては治安の悪さも改善されており、自信を持って東大阪市に住んでいると言える。いいまちだと、もっと紹介してほしい。

コーディネーター：
昨年度の委員も同じだったが、皆さん東大阪市が好き。

委員 A-21：
ここから出ようと思っていない。住みやすい。

委員A-17：
提案3の「子どもの希望を叶え」について、不登校児童生徒や発達障害がある子どもたちのサポートはもちろん大事だと思っている。ただ、そちらばかりに目が向けられすぎてしまうと、他の児童生徒の授業の場・時間が奪われかねない面があることも事実。サポートとあわせて、授業を聞きたい児童生徒が聞けない状況にならないような策を立ててもらいたい。

コーディネーター：
「インクルーシブ」という言葉を最近よく使われる。できるだけ分けないようにしよう、といった取り組みが多くの学校で行われている。これは障害がある子どもだけに限った話ではなく、何でもないと思っている人たちにとっても、先ほどの話に出た「選択肢を持っていない人がいる」という学びにもつながっている。一方で学習という観点も大切。ある学校では、もちろん全ての授業というわけにはいかないが、差がつきやすい数学等はかなり細かく習熟度別に進めていると聞く。

B 班
コーディネーター：
提案書をもとに良い点や改善点、感想について意見交換を行う。他の方の意見を聞いてさらに俯瞰的に提案書を見ることで、様々な視点で考えるきっかけになるだろう。

委員 B-20：
よくまとめていただいた。行政の部分は自分たちにはどうにもできない内容もあるが、住民として地域として自分ができることはできる限りやっていきたい。

委員 B-19：
全体的に自分たちが議論した結果が書かれてあり、自分たちが参加した実感が湧くものになっていて良かった。

委員 B-17：
全て良い提案だと思った。前回の会議より1ヶ月が経ち、細かい内容を忘れかけていたが、提案書を読むことでこれまでの会議の内容を思い出すことができた。自分ができることとして、いろんな行事へ参加することがあげられる。地域福祉課から市の取り組みを紹介してもらい、たくさんの取り組みが実施されて

いることを知った。これまではあまり参加していなかったが、興味を持ったのでぜひそれらの行事へ参加していきたい。

委員 B-16：
中学校給食において問題となるのは、提案書の内容をどのようにして実行していくかである。行政が実際に動いてくれていることを知り、少し嬉しかった。

委員 B-14：
自分自身が小学生の頃、愛ガードの担当者に仲良くしていただいた思い出がある。その取り組みに関するような内容が提案の中に入っていてよかった。

委員 B-13：
自分の思っているような内容が反映されていてすごく嬉しかった。そして意見が反映された取り組みについて、今後市政だより等で情報を受け取っていくことができたら良いと思った。

委員 B-12：
これまで会議を重ねてきて非常に多くの意見が出ており、これぞマンパワーだと思った。これらのたくさんの意見をまとめ、実現させていくことが最終的な目標である。委員の一人としても、市民の一人としても、これから頑張っていきたいと思った。

委員 B-11：
まとめられた提案書を見て、沢山の意見があったのだと改めて感じた。自分一人では思いつかなかったことも提案として出たので、それらの提案の中から自分ができることを少しでもやっていきたいと思う。

委員 B-10：
沢山意見が出ていると感じた。ただ、この内容全てを実行するのは大変である。提案書については、これだけの活字を発信すると見る側もしんどい。イラスト等を活用しながらもう少しコンパクトにまとめて提案したら良いと思う。皆さんの意見を吸い上げるということからは反してしまうかもしれないが、一つの工夫として考えたほうが良い。

委員 B-7：
提案書には、B班だけではなく A 班の話し合いの内容も沢山あった。自分たち住民にできることも多くあり、その中に中学生でもできるようなことが結構あったので良いと思った。

委員 B-6：
「世代を超えて繋がり支え合い、子どもも高齢者も誰もが主役となる」というフレーズは、今回の自分ごと化会議における皆さんの意見が反映されている言葉で、非常に良いと思った。

委員 B-3：
交流の場があれば、参加する側も参加しやすい。全て良い意見だと思うが、特に2番目の提案が良いと思った。自分は大学生であり、高齢者と交流したいと思ってもなかなかそのような場が無いため、どのようにして交流したらよいかわからない。そのような場を企業や行政に作ってもらえたら参加しやすい。

委員 B-1：
提案書を見て、居場所を作る必要があると皆さんが認識していらっしゃるとわかった。ただ実際に取り組みを行うとなると、予算の問題等様々なハードルがあると思う。内容については、もう少しコンパクト化したり、なじませたりする必要があると思う。

委員 B-27：
自分以外の人が課題と考えていることを知れてよかった。将来的にそれらの課題の中から、何かしらが改善されていくと良いと思った。今後改善を実感することができれば楽しみに繋がると思った。

委員 B-26：
全ての意見に賛同している。特に共感しているのは防犯カメラを設置するという提案である。カメラの設置によって事件が解決することもよく聞くので、よりよい社会になる提案だと思った。

委員 B-23：
この提案書の中で特に障害者のことについて注目している。障害者だけでなく障害者の親も支援や息抜きがあると良いと思った。

委員 B-22：
様々な意見があった。自分の納得できる意見が沢山あって良かった。

委員 B-21：
こども議会をつくるという提案について、空いた施設を活用して子どもたちの参加を呼びかける等、考えていくと面白い活動ができるのではないかと思った。

コーディネーター：
様々な視点から議論し、皆さんの意見が一つの提案となった。一人一人考え方が違うので、それがこの会議の良さだと思った。残りの時間でより内容を深めていく。

コーディネーター：
確かに提案書は分厚くなっているが、これらの提案が実現できればとても良い社会になると思う。前回まで議論した内容をマトリックスにして提案書に挿入した。その中には、現役世代による取り組みとして「子どもが大人になりたいと思えるような社会の実現」を記載している。子どもから大人になり、そして高齢者まで、一気通貫でイメージできるように表した。先程コンパクトにしたいという話があったが、もう少し内容を考えていくと、概要版のようなものにまとめられるのではないかとイメージしている。

コーディネーター：
内容を確認していただきながら、ブラッシュアップするために、みなさんより改めて意見をいただきたい。

委員 B-21：
市長に読んでもらうには、提案書の文言が長くて読みにくいものになっているのではないか。最後まで見てもらうには、うまくまとめてもらう必要があると思う。もう少しまとめてもらいたい。

委員 B-16：
完成した提案書は、一般の人々にインターネットやホームページで見てもらうことになると思う。それらの方法だと自分から積極的に情報を取りに行かないと知ることができない。自分自身も参加する側になるまでこのような会議をやっていることを知らなかった。自治会等で配布することができるのではないか。極端な話だが、市民全員が参加する会議であれば良いが、そういうわけにはいかない。これらの内容を実現するためには情報の伝え方が大事なのではないか。

委員 B-13：
「子どもが大人になりたいと思えるような社会の実現」と提案書に書かれているが、ぼんやりとした表現でわかりづらかった。子どもから見て大人が楽しそうと思うのは、大人が自分にとってプラスになることをやっている時だと思う。自分には子どもがいないので、どこでこれを感じ取ってもらえるかわからない。

コーディネーター：
若者の意見としてなにかあるか。

委員 B-7：
職業体験等、大人が働いている姿ややりがいを感じている姿を知ることで、「自分もやってみたい」「そんな大人になりたい」と思う。

委員 B-13：
そういう機会があれば良いと思う。周りに子どもがいない方は機会があっても参加しづらい。参加者がよく知らない方ばかりだと不安に感じるので、なかなか気軽に参加しづらい。どういう機会があれば参加しやすいだろうか。

コーディネーター：
B 班の会議であがった提案として、両親が働いている職場に子どもが訪れるという話もあったかと思う。

コーディネーター：
企業ではファミリーデーとして、子どもや家族が勤務先の会社へ来る機会がある。そういう機会についてどう思うか。

委員 B-21：
逆に独身デーを作ったら良いのではないかと思う。また、少子化社会ではあるが、独身補助制度等も有効だと思う。独身世帯の人が知ったら東大阪市に移住してくれるようなこともあるかと思う。独身世帯にも着目する必要があると思う。

コーディネーター：
現役世代へのサポートという切り口である。なにか他にも提案書に付け加えたい意見はあるか。

委員 B-1：
独身デーや企業訪問等の催事を開催するとしたら、東大阪市というとモノづくりしか思いつかない。提案書全体の話をすると、東大阪市らしさを付け加えると良いのではないか。どの市でもできるようなものであれば東大阪市で作成する意味が薄まってしまう。もう一味加えたい。

コーディネーター：
東大阪市外の方からすると、愛ガード等のように随所に東大阪らしさはあるものの、やはり全体として東大阪市の提案書であることを、より意識すると良いのではないか。

委員 B-1：
ただあまり大阪を強調すると嫌がれるかもしれない。

コーディネーター：
東大阪市らしさについては、東大阪発として全国で発信すると良いのではないか。支援される側だけでなく、支援する側にもなり得るというのは全国共通の話である。

コーディネーター：
日本全国へ先進事例として市の取り組みを発信するのはよいと思う。

委員 B-17：
自分の子どもの小学校では子どもが親に仕事のやりがいを聞く授業があり、親としてはそれが嬉しい。大人が生き生きしていないと、子どもは大人に憧れない。また、運動する習慣をつけることは、記憶力の向上や精神面の安定につながっているとされている。みんなで運動習慣をつくることができるイベントや場所があると良い。将来的にも心身ともに健康になることができるのではないかと思う。現役世代としては、子どもに生き生きとした大人の姿を見せることができる機会となる。

コーディネーター：
現役世代が生き生きとした姿を見せる方法として、運動という切り口である。

委員 B-6：
独身の大人と子どもを繋げるために、共通点を見つけるとしたら趣味等になると思う。無線機やプラモデル等、大人が熱中している姿を見ると子どもも憧れたりするのではないか。趣味というと、なにかに特化した内容となるため、なかなか集まるのは難しいかと思うが、その機会を通じて知識が増えるような場があると良い。ある企業の取り組みとして、地域の子どもの提案を取り入れていることもある。企業も助かり、子どもも社会貢献していると感じることができる。子どもと大人が一緒に仕事を、と考えると、パソコンの入力等をやってもらえると助かると思った。

委員 B-3：
大人が働いている姿を見せる機会として考えたのは、学校の授業である。成功された大人の講演会等はよくあるが、様々な人に来てもらって子どもに話してもらうのも良いのではないか。子どもが聞きたいと思う人から話を聞けるような形式を取ると良いと思う。また社会見学として、自分が見てみたい職場を見に行くことができる機会があれば、子どもは色々な選択肢を知り、将来の選択肢を広げることができると

思う。また、提案書については量が多いと思った。私たち住民ができることだけでも、わかりやすいメッセージを5つ程度取り出す等工夫したほうが良いと思う。具体的なアクションを示すことでより実行に移しやすくなる。

コーディネーター：
先程話にあがった自治体への周知を行う場合等にも有効だろう。

委員 B-27：
交流の場として新しく開拓できる場所が無く、集まるのが難しい。今の時代だとネットライブのように、老若男女で世代問わず文化的なイベントができるようなものがあれば良いと思った。音楽イベント等があると良いのではないか。東大阪市内の人は無料で、市外の人からは入場料を払ってもらう等して利益を生み、そのお金を福祉分野等の施策に還元することで、活動のイメージアップに繋がるのではないか。また東大阪市はモノづくりのイメージが先行しているが、市に今までにない新しい文化が生まれると良いと思う。

コーディネーター：
子どもはいずれ大人になる。大人になりたいと思って大人になるのと、自然に大人になるのは違う。自然と大人になるのではなく、大人になりたいと思える社会を作る意識が必要である。現役世代は子どもたちにとって良い見本となる必要がある。

コーディネーター：
前職の会社では、「よく生きる」という企業理念があり、年を取れば取るほど幸せな社会にしようという意味が含まれている。大人になって子どもの頃は良かったと思うのではなく、子どもから大人になっていくにつれて、どんどん幸せになれる社会が良い。

コーディネーター：
このテーマだけでも沢山の意見が出てきそうである。全世代にとって良い社会でありたい。ミニ議事堂をつくるという話もあったが、面白い発想だと思う。イベント的な子ども議会はあるが、継続してできるようなものだと良い。子どもが大人になるためのトレーニングのようなものができる環境があると良い。

A班まとめ

・（提案1＆全体）多様性の視点を追加。（ジェンダーの視点や在日外国人への配慮等）

（例）自治会の会議に若い方や女性が参加しやすくなる工夫

選択肢を持てない人がいるという視点を追加。（選択肢がある人からは気づきにくい部分）

・（提案1）学校という場を活用した交流

（例）スキルを持つ高齢者を講師として招く。

・（提案2）新しい博物館がにぎわいの場に。

花園ラグビー場をラグビーやサッカーだけでない、全ての人にとっての拠点化へ。

・（提案6）危険箇所のマップ化

・（提案7）提案書の中で行政がすでにやっていること、まだできていないところを整理し、行政の取り組みを市民に分かりやすく情報発信することが必要。

・（全体）この提案項目をいかに実現していくか。「私たち住民にできること」は、人によって実現のハードルが異なる。できるものから始めていくことが大事。

「行政ができること」については、多くの項目があるので、まずは優先順位をつけることが必要。そして進捗状況を可視化できるようにする。今回参加している委員の皆さんがチェックできるような見せ方が求められる。

B 班まとめ

・（提案1）障害者の家族等支える側の人への支援や息抜きの機会の提供

・（提案2）老若男女で世代問わず文化的なイベントの開催

・（提案5）空いた施設を活用した子ども議会の開催

独身デーや独身補助制度等による現役世代へのサービスや支援

・（共生へのパラダイムシフト）「子どもが大人になりたいと思えるような社会の実現」

大人が自分にとってプラスになることをしている姿、働いている姿や何かにやりがいを持って取り組んでいる姿を見ることで大人になりたいと感じる。職業体験や職場見学、授業での交流、趣味での交流の機会等方法がある。

・（全体）内容をよりわかりやすく伝えるとともに、行動に移すことが大切ではないか。⇒イラスト等を活用して内容をコンパクトにする。

提案書の周知については工夫が必要ではないか。⇒ウェブサイトには載るが、興味を持った人にしか届けることができない。例えば自治会等の地域のコミュニティに周知するといった工夫もできるのでは。

東大阪市らしさがもっとあると良い。

3.全体会

コーディネーター：

この提案書について、発言したい方や言い残した方はいるか。

- なし -

コーディネーター：

それでは、これまで出た意見や意見提出シートをふまえて再度修正し、皆さんにお送りする。皆さんに確認いただいたうえで完成とする。

全4回通しての感想、今回のテーマや提案書の内容をふまえて今の東大阪市について感じていること、こんな東大阪市にしたいと思うことに関して、発言や感想をいただきたい。

委員 A-19：

貴重な場をいただき、感謝している。第2回を欠席したが、理解できる内容にまとまっていてよかった。現役から離れて5年経ち、緊張感を持つような機会がなかったが、今回の参加を通してこれから新たに勉強していけるのでは、と思うようになった。全てではないものの具体的に取り組める内容があった。今後自分なりに精査しながら取り組んでいきたい。東大阪市でこんな取り組みをしていて、刺激を受けたこと、そして私でも取り組めることがあると、家族や市内外に住む友達に広げていきたい。

コーディネーター：

是非お願いしたい。

委員B-22:

参加して色んなことを知れて良かった。

コーディネーター：

最初参加したときどう感じたか。来て良かったか。

委員B-22：

自分から発言できたし、色んな人の話を聞くことができた。来て良かった。

委員 A-20：

今も透析患者の送迎の仕事をしているが、それほど大きな緊張感を感じる機会は少なかった。初めは自分が参加して良いのか、と思っていた。自分が意見を言うというよりも、他の人の意見を聞いて勉強させ

てもらい、自分にできることを考えようという思いで参加してきた。今回、様々な年代の方が参加されており、特に女性が多い。今日の話し合いの中で、「今もなお男性社会になりがちの世の中で、女性の意見も取り入れる」といった趣旨の発言があり、本当にその通りだと思った。この会議を通して、女性が男性とは異なる視点から、中身のある忌憚のない意見を述べていたのが印象的だった。
自分ごと化会議なので、自分にできることから取り組んでいきたい。最近ゴミ拾いを意識して行うようにしている。今後こういった機会があれば参加したい。
最後に1つだけ言いたい。最近意識して市の広報誌を読むようにしている。市民として市がどんなことに取り組んでいるのか知ることは義務だと感じている。今後も広報誌の作成をよろしくお願いしたい。

コーディネーター：
本日40名が参加しており、そのうち20名が女性。半分が女性委員の行政会議はほとんどない。何よりも中高生が今回参加している。

委員B-13：
こういった機会がないと、自分の考えを発信することや今回のようなテーマについてじっくり考えることがない。年代関係なく、それぞれの考えを聞くことができて、自分自身意識するようになった。貴重な時間だったと思う。今後も意識して情報収集したい。提案書に書かれている内容について、子ども・高齢者・現役世代が100%納得するような実現は難しいかもしれないが、1つでも多くの意見が反映されたらいい。

コーディネーター：
A 班の方は繰り返しになるが、この会議は東大阪市民の縮図や、民意を代表するものではない。偶然抽選に当たって参加された皆さんの意見のとりまとめが提案書である。他の国では民意の代表といった形の会議があり、その場で決まったことは行政の意思として取扱うことがある。しかしながら、この自分ごと化会議はそうはしていない。なぜなら代表という形になると、どうしても発言が固くなってしまう。または用意された発言になりかねない。たまたま抽選で当たって参加をし、普段感じていること、思っていることを話してもらうことで提案書をつくっていく。そのやり方の方が自由な発言ができるものと思っている。
委員A-24：
受け身な性格で、自分から積極的に参加・発言することは少なかった。こういった場で色んな方の考えを聞くことができ、自分も発言したいと思った。普段生活していても気づけないことを知ることができ、今まで考えていなかった部分を考えられるようになった。この会議を通して、主体性・自主性の大切さを実感することができた。会議の内容を知人に伝えていきたい。

コーディネーター：
高校生が周りの友達に伝えることは、大人が伝えることよりもインパクトが大きいはず。是非伝えてほしい。

委員B-1：
皆さん上手に話される。自分が漠然と思っていたことを委員のどなたかが発言されていた。意味のある会議だと思った。コーディネーターも上手くまとめてくれていた。ただ、提案書にまとめてしまうと、細かなところの味わいがどうしても消えてしまう。周知に関しては、もう一捻りほしいといった意見も多かった。後で提案書を読んで我々自身もこの会議の内容を思い出し、人に話せるようなものになればなおいい。これからのまとめに期待している。

コーディネーター：
毎回課題に感じており、もどかしいところ。皆さんの意見を文章にまとめてしまうと、どうしてもまるまってしまう。それは皆さんが改善提案シートを書くときも同じだと思う。熱さが上手く伝わらない。何とかできないか、再度考えてみたい。

委員A-26：
今回の会議に参加する前は、正直行政が何をしてくれているのか分からず、実感することもなかったので、興味関心もなかった。色んな方の意見を聞くことができ、自分も市民の一員としてできることがあるのでは、と改めて実感できた。市が色んな施策をしてくれていると知ることができたので、もっと知って情報を自分から発信できるようになりたい。
あまり関心がなかったが、この会議に参加して東大阪市を少し好きになった。良い市だと思ったので、もっと広げていきたい。

コーディネーター：
ウェブデザイナーをされていると聞いた。今回意見として出た、市HPや危険箇所のマップ化については、ご協力をお願いしたいところ。
委員B-6：
行政の会議がどのように進められているのか、自分のスキルアップのために参加した。様々な世代の皆さんの意見を聞き、自分自身会議にのめり込むことができた。自分にできることがあると気づけ、自分のためになった。今回でこの会議は終わりだが、自分たちの意見がどのような結果になるのか、最後まで見続けていきたい。

コーディネーター：
どのように進んでいくか、みなさんにチェックしてもらいたい。

委員 A-2：
参加させてもらえたこと、提案書にまとめていただき感謝している。元々好奇心は強いタイプだったが、より様々なことに好奇心を向けられるようになった。この会議に参加してより視野が広がったと感じている。これから東大阪市がどう変わっていくか見守っていきたい。参加できて良かった。

コーディネーター：
是非色んな取り組みに参加してもらいたい。

委員B-14：
自分では思いつかない意見が聞けて刺激的な時間だった。次もこのような場があれば是非参加していきたい。

コーディネーター：
これからも声がかかるかもしれない。是非参加してもらいたい。

委員 A-3：
この会議に参加させてもらい、今東大阪市がされている取り組みやこれから取り組もうとしていることについて詳しく知ることができた。様々な立場にいる皆さんの思いや意見を聞くことができ、勉強になった。事務局から様々な説明を受けている中で、東大阪市を良くしたいという気持ちが伝わってきた。東大阪市が好きになった。A 班に他県から移住された方がいて、「東大阪市が好きになった」とおっしゃっていた。これからもそういった方がもっと増えるといい。

コーディネーター：
今まで特に東大阪市に関心がなかった方やたまたま引っ越しをしたまちが東大阪市だった方が、会議に参加することで東大阪市を好きになった、との発言を多くいただいた。とてもいい財産だと思う。

委員B-20：
先日65歳になり、前期高齢者になった。これからの人生もわくわく、ドキドキ、ときめきのある日々を送りたいと思っていた。そんなときにこの会議を参加する機会をもらった。自分自身がときめくためにやって

いかないといけないことを考えられた。そして提案した内容が実現することで、東大阪市がときめきのあるまちになると思っている。

コーディネーター：
様々な世代が集う場に参加する機会はきっと多くはないはず。是非これからも機会があればこのような場に参加してもらえれば。

委員 A-14：
皆さんの意見を参考に自分自身考えさせられることがたくさんあった。SNS 等を通じてクラフト関係の配信をしている。お子さんから高齢の方まで、おうちでできることを発信できればと思い、行っている。色んな輪が広がれば。配信者同士で交流できる機会もあるので、最終まとめてもらった提案書を参考に、話をした内容を世界に発信していきたい。海外の方が翻訳されたものを目にする場合がある。

コーディネーター：
とても重要。行政からの発信は固くなってしまう。是非お願いしたい。

委員B-19：
今回会議に参加することで、今まで知らなかった市の魅力や取り組みに気づいた。自分の意見を市に反映させられることがあると実感できた。

コーディネーター：
是非今の話をまわりの友達に伝えてほしい。

委員 A-5：
全4回の会議を通して、自分から発言することがもっと好きになった。新たな視点から東大阪市を見ることができた。とてもいい経験になった。
委員B-7：
東大阪市について知らないことばかりだったので、勉強になった。自分の意見が提案書にまとめられているのを見て、市のために役に立てたと実感できた。いい経験になった。

委員 A-25：
東大阪市の LINE でラウンドテーブルの存在を知った。母や姉から背中を押され、参加することになった。色んな取り組みを知ることができた。

委員 B-21：
この会議に参加させてもらったこと感謝している。行政の政策について元々興味があった。提案書にある「こども議会」は是非つくってほしい。

コーディネーター：
B 班から「常設のミニ議事堂をつくっては」との意見が出た。イベント等を通して子どもの意見を聞いても、それで終わってしまうことが多い。それを常設するというのは、民主主義の根幹だと思う。子どもはいつか大人になり、高齢者になる。その流れをつくれるのではないか。

委員 A-22：
このような場に参加したことがなく、市外の学校に通っているので、今回参加したことで東大阪市がどんなことをしているのか知ることができた。LGBTQ や障害等始め、新たな視点に気づくことができてよかった。

コーディネーター：
提案書にまとめたものをもう一度送付するので確認いただきたい。是非しっかり目を通してほしい。この後どう変わっていくかも含めてチェックしてもらいたい。
ここからは各班のコーディネーターより全体の総括をしていく。

コーディネーター：
まず、今皆さんの感想を聞かせていただき、東大阪市が好きになったとか、東大阪市の魅力を発見したとか、あるいは好奇心が湧いてきたとか、自主性や主体性が生まれたといった言葉をいただいて、大変良い場だったと改めて思う。私は普段人事・人材組織開発のコンサルティングという仕事をしており、心理学・経営等の分野にも関わりがある。やる気が先か行動が先かという話がある。もちろんやる気が出てから行動するというのはあるが、行動してみてからやる気が出てくることも非常にある。そのため、今回思い切ってこの会議に参加して話し合ってみると、何かとても興味が湧いてきたという方も多くいらっしゃるのではないかと思う。皆さんの生活に即した飾らない声を集めて今回の提案書が出来てきた。これを具体的な行動につなげて、実現していければ良いと思う。

コーディネーター：
子どもが大人になりたいと思えるような社会を作っていくという意見が皆さんから出てきた。もっと東大阪市らしい謳い文句が言えたら良いのではないかという議論もあったが、私はその言葉で十分思いが伝わると感じた。それを全国区にしたいと思っている。皆さまの声としてその思いが伝わってきたことが、私

にとって非常に貴重な経験となった。また、自分で１歩踏み出してみると景色は変わる。今回の機会を通じて参加された皆さまは違う景色を見られたのだと思う。中高生の方についてもそうである。大人が子どもにその景色を見せることが、次の東大阪市を作っていく。これから私もその様子を見続けていきたいと思う。

コーディネーター：
私はコーディネーターの仕事を 100 ヶ所程度務めてきたが、今回の会議は非常に良かったと思っている。テーマもそうであるし、委員の皆さまが、参加するたびに新しいことを知って自分ごと化していく変化をとても感じることができた。形だけで終わらせない事務局の前向き感もあった。やはりこのような会議は徐々に出席者が減る傾向にあるものの、この会議では初回と最終回で出席人数がほぼ変わらなかった。参加してくださった方々も他に用事があったり、本当はやりたいことがあったりする中でこちらを優先して参加してくださっている。それも満足度の高さの１つの表れだと思う。提案書を作ることもこの会議の大きな目的ではあるが、そのためにこのように集まっていただき、様々な話を聞きながら自分の話をするという、このプロセス自体もとても大きな目的の１つだと思っている。皆さまにはこの場で終わりとするのではなく、ぜひこの後もこの提案がどうなっていくのか、東大阪市自体にも関心をさらに持ち続けていただけるとありがたい。
私と東大阪市との関係は市長から始まっている。コロナ禍の際にコロナ感染症予防ワクチンを提供することになった際に、市長より逐一現場の状況を伝えていただき、それをもとに政府として配布の仕方等を変えていった経緯がある。それ以来、市長ととても親しくさせていただいている。東大阪市の取り組みというのは市長の熱意から始まっている。それは本当にとても貴重な財産だと思うので、僕もこれからも東大阪市に関わり続けていきたい。これからもぜひ皆さまに注目し続けていただければと思う。

事務局：
引き続き野田市長よりご挨拶いただく。

野田市長：
４回にわたり会議に積極的に参加していただき感謝申し上げる。今回中高生の皆さんにも参加していただき嬉しく思う。中高生の方々も、何かを変えることについてしっかりと主張することができるのだと改めて思った。改めて思ったというのは、私の経験上の話になる。私が高校２年生の時に、当時通っていた高校では私服で通学できるようにしようという話になり学生による委員会が立ち上がった。委員会は立ち上がったものの、１クラスに１人ずつ委員として選ばなくてはいけないが、なかなか立候補者が出なかった。誰も出たくない中で延々と話し合いが続き、もうこんなことであれば自分がやると言って委員となった。するとみんな拍手してくれた。委員が 30 人集まり、今度は委員長を決めなくてはいけなくなった。

するとまた話し合いが続いたため、私がやりますと手を挙げたら一瞬でみんな拍手してくれた。アンケートを取ったり職員会議にも出たりして、結果として私服で登校できるようになった。あの時の自分の経験則で、1 歩 2 歩と踏み出すことで変わることもあるのだと感じている。その気持ちはどこかで今もなお残っている。 昨年に引き続き今回が 2 回目の本市における自分ごと化会議であった。東大阪はある程度大きな市のため、このような会議を開催しても大丈夫か初めは正直少し心配していた。今まで様々な意見を聞く際には、自治協議会や商工会議所から意見を聞いており、市民公募は 1 名か 2 名だけの枠であった。実際なかなか忌憚のない意見や自由闊達な意見をいただくことは難しかった。しかし今回の会議を開催してみようかと話をしてみると、前向きな職員ばかりであるため開催してみようという話になった。その次に心配したのは、いきなり封筒が届いても皆さまに来ていただけるのだろうか、様々な意見を言っていただけるだろうかということである。それらの心配はもう私の勝手な想像の世界であった。お詫びしなくてはならない。昨年と同様、皆さまより多様な意見が出たというふうに聞いている。提案書の取りまとめも文章の温度感が若干変わるかもしれないが、皆さまからいただいた意見は市役所の全職員で共有し、これから私達が様々なものを作り上げる際にどうしたら良いのだろうかと考えるための 1 つのベースにする。必ず私たちはそのように取り組んでいく。子ども会議の開催という意見があったが、実は東大阪市では中学校の生徒会の意見を聞く場が 1 日だけある。しかし今回はそのような場を常設するという意見があった。大変かもしれないが、子どもファーストを掲げた以上、そのような場はやはり必要だと思う。皆さま方からの様々な意見をこれから汲み取っていく。 また今日の会議が終わった後も、様々な市と繋がるツールがある。もし私を見かけた際には声をかけていただければと思う。ぜひ東大阪市を好きになって、もっと好きなまちになるためにこれからも皆さまと一緒に考えていきたいと思う。皆さまには貴重な時間をいただいたことに心から感謝を申し上げ、この素晴らしい縁をこれからもずっと続けていきたいと思うのでよろしくお願いする。これにて私からの感謝の意とさせていただく。	
4.事務連絡 5.閉会	＜省略＞